

## 第二の創世 プリーモ・レーヴィ「ケンタウルス論」をめぐって 〈前編〉

山崎 彩

### 1. はじめに

プリーモ・レーヴィ (1919-1987) は、アウシュヴィッツ強制収容所での体験について綴った『これが人間か *Se questo è un uomo*』(1947, 1958)、『休戦 *La tregua*』(1963)、『溺れるものと救われるもの *I sommersi e i salvati*』(1986) といった作品の傍らで、ファンタジー、あるいはサイエンス・フィクションとも分類されうる幻想的な短編小説を書き続けた。だが、これらの短編小説は、発表時にはあまり評価されなかった。短編小説の再評価を試みた Cassata (2019: 398) は過去の批評家たちの酷評に言及し、「実際、レーヴィの短編小説は、概してひとつの解釈の覆いの下に埋もれてしまったのだが、その解釈は (中略) 何度も繰り返されるラーゲル<sup>1</sup> というテーマの変奏を読み取ったに過ぎなかった」と述べている。

「アウシュヴィッツについて書き続ける作家」——『これが人間か』と『休戦』というアウシュヴィッツを証言する作品によって有名になったレーヴィには、常にこのような評価が付きまとった。同様の限定的な評価の例として、Bidussa (2017: 385) は、レーヴィの作品が「論証のレベルではアウシュヴィッツの克服可能性の仮説を準備しているように見えるとしても、語りのレベルでは、その克服不可能性、より正確に言えば、その永続性という、正反対のパラダイムが肯定される」と述べ、さらに、「(レーヴィの) 歴史的な時はアウシュヴィッツの子午線上で止まっている」と断言することによって、作家を、アウシュヴィッツの記録文学というカテゴリーの中に閉じ込めようとした。

一方で、Gordon (2003) や Pianzola (2017) は、レーヴィの作品に「証言」を越えたさらに普遍的な道徳的価値、Gordon の言葉によれば「倫理 *etica*」を読み取ろうとする。Belpoliti (1997: XIV) は、レーヴィの執筆物が、アウシュヴィッツの証言やエッセイといったものでさえも「強く文学的 *fortemente letterarie*」であると指摘し、「つまり、レーヴィの本は、その程度は異なるとはいえ、文学に特有の『フィクション』に満ちている」と述べているが、レーヴィの作品について考えるとき、起きた出来事を記録した単なる「証言」としての価値だけではなく、むしろ文学としてのより普遍的な価値が評価されるべきであるとするならば、Gordon と Pianzola の解釈の

---

<sup>1</sup> アウシュヴィッツ強制収容所を指す。「強制収容所」を表す一般的な用語は、イタリア語では“*campo di concentramento*”で、ドイツ語では“*Konzentrationslager*”あるいは“*KZ*”であろう。しかしレーヴィは、定冠詞をつけた「ラーゲル *il Lager*」を、「アウシュヴィッツ強制収容所」という意味として使った。

姿勢に同意できる。ただし、気になることは、その解釈が後付け的というか、あたかもレーヴィが、1947年の『これが人間か』から1987年の『溺れるものと救われるもの』までまったく変わらぬ考え方で執筆をおこなっているかのように解釈していることだ<sup>2</sup>。Mattioda (2011: 7) が指摘するように、主題などの連続性と一貫性にばかり注目してきた「共時的な方法」ではなく、「通時的な」解釈の試み、対象となるテキストがどのような環境の中で書かれたのか、そのテキストの前後にある他のテキストとの関係はどのようなものかといったことも考慮した解釈の試みがこれからは必要だろう<sup>3</sup>。

本稿では、レーヴィの短編小説の中でも評価が高い「ケンタウルス論 *Quaestio de Centauris*<sup>4</sup>」を取り上げて、この奇妙な物語が表象しているものは何かを考える。その際に、「ケンタウルス論」とほぼ同時期に書かれた小説『休戦』との関係、「ケンタウルス論」のコンテクストとなっているダンテ『神曲』地獄篇第十二歌からの引用についても考察する。結論としては、複数の解釈の可能性が浮かび上がることになるだろう。

## 2. わかりにくい姉妹関係

1945年10月にアウシュヴィッツから帰還したレーヴィが、処女作『これが人間か』の出版をトリノの名門出版社エйнаウディから拒絶されたのは有名な話である。結局、この本はもっと小さな出版社から1947年に出版されるが、レーヴィが作家として注目を浴びるのは、1958年にエйнаウディがこの本を再出版した後のことである。この二度目の出版は好評を得て、続く『休戦』は、その大部分が1961年に書かれて1963年に出版された (Mattioda, 2011: 65)。その一方で、この時期、レーヴィはファンタジックな作品も旺盛に執筆し、1958年から1963年のあいだに新聞や雑誌に10編の短編小説を発表している (Mattioda, 2011: 62)。そのうち最初に発表されたのが「ケンタウルスのトラーキ *Il centauro Trachi*」で、1961年に雑誌に発表され、その後1966年、レーヴィの最初の短編集『博物誌 *Storie naturali*』に「ケンタウルス論 *Quaestio de Centauris*」というタイトルで収録された (Mattioda, 2011: 76)。つまり、「ケンタウルス論」は、『休戦』とほぼ同時期に書かれたと言って良い。

『休戦』とこれらの短篇小説との関係について、レーヴィは1963年のインタビューで、雑誌に発表した短篇小説を一冊にまとめる可能性について尋ねられ、「それは、『休戦』とわかりにくい姉妹関係にある本となるでしょう」 (*Opere*, III: 11) と述べている。この「わかりにくい姉妹関係 *gemellaggio poco comprensibile*」とは何を指すのだろうか。

## 3. 「強制収容所レポート」と短編小説「ムネマゴギー」

まず、確認しておきたいことは、実はレーヴィが、その執筆活動の最初から、「証言」の執筆と「ファンタジー」の執筆を同時におこなっていたということだ。

1966年に出版された最初の短編集『博物誌』<sup>5</sup> は、それまでにレーヴィが書きためてきた作品

<sup>2</sup> 例えば、Pianzola は、異なる時期に書かれた短篇小説をフラットに並べて検討することによりレーヴィの小説全体の「教訓 *morale*」を読み取ろうとする。

<sup>3</sup> 短編小説の時代ごとの変化については Cassata (2019) を参照。

<sup>4</sup> 翻訳は『天使の蝶』(関口英子訳, 2008) 所収。

を集めたものだが、収められた短編小説の中でもっとも古くに書かれた小説は「ムネマゴギー（記憶喚起材）I mnemagoghi」で、1946年の作である（Cfr. *Opere*, I: 1503）。このとき、レーヴィは、彼と共にアウシュヴィッツから生還した医師のデ・ベネデッティと「モノヴィッツ・ユダヤ人強制収容所の公衆衛生制度に関するレポート<sup>6</sup>」を共同執筆しているところであった（Cfr. *Opere*, I: 1503）。興味深いのは、「ファンタジー」であるこの小説が、「証言」である「レポート」にコンテクストを提供していることである。

「ムネマゴギー」の登場人物はふたりの医者である。物語は、若いモランディ医師が年老いたモンテサント医師の半ば朽ち果てた医院を訪れるところから始まる。老いた医師は、自分の秘密の発明品を若いモランディに見せる。それは、記憶を発生させる触媒とも言える「匂い」の詰まった小瓶で、モンテサントはこれを「ムネマゴギー（記憶喚起材）」と名付けたという。その「匂い」を嗅ぐと特定の過去の記憶が呼び戻されるのだ。モンテサントの勧めに従ってモランディが小瓶に詰められた「匂い」を嗅ぎ、感想を述べると、モンテサントもそれぞれの小瓶から喚起される過去の思い出を語る——。つまり、これは、アウシュヴィッツ強制収容所に関するレポートを作成中のレーヴィが、共同執筆者のデ・ベネデッティとふたりでおこなっていた作業をなぞったような物語になっている。

小説「ムネマゴギー（記憶喚起材）」は「モノヴィッツ・ユダヤ人強制収容所の公衆衛生制度に関するレポート」の外側で起きていること、すなわち、執筆者たちの作業をアレゴリカルな形で表象しているのである。レーヴィは、ここで、「証言」を書くと同時に、証言をしている自分自身のことは「ファンタジー」という形で描いている。同様に、短編小説「ケンタウルス論」もまた、同じ時期に「証言」として書かれた作品『休戦』と、何らかの関係を持っているとは考えられないだろうか。

#### 4. 『休戦』と「ケンタウルス論」における「第二の創世」

『休戦』と「ケンタウルス論」を読むと、このふたつの作品のもっとも明らかな関係は、双方のテキストに、災禍の後の「再生」、レーヴィの言葉によれば「第二の創世 *seconda creazione*」（*Opere*, I: 596）に関する描写が含まれていることである。そして、その両方の描写において、聖書における天地創造の記述と古代ギリシアの宇宙論が混合された、独自の生成論が語られる。

まず、『休戦』においては、冒頭「大収容所 Il Campo Grande」において、ドイツ人の撤退後、アウシュヴィッツに取り残され「大収容所」に集められた人々（病人、看護人、子どもたち）の描写の中に、「ノア Noah」という人物が登場する。「貪欲で好色 vorace e salace」（*Opere*, I: 323）な「ノア」は、収容所の死体運搬を仕事としているようなのだが、収容所の、特に女性の共同寝

<sup>5</sup> 収められていた作品はすべて幻想的な短篇小説で、それまでの作品とは一線を画すものだった。そのため、編集者はこの短編集を偽名で出版するように勧め、短編集は「ダミアーノ・マラバイラ Damiano Malabaila」という作者名で出版された。だが、本のそでに書かれた解説を読むと作者がレーヴィであることがわかるようにしてあった（*Opere*, I: 1507-8）。ちなみに、マラバイラは、「マラバリア（悪い乳母 malabalia）」のアナグラムと考えられる。

<sup>6</sup> “Rapporto sulla organizzazione igienico-sanitaria del Campo di concentramento per Ebrei di Monovitz (Auschwitz - Alta Slesia)”, «Minerva Medica», XXXVII, 47, 24 novembre 1946, pp. 535-44, ora in *Opere*, I: 1177-94.

室をうろつき、逢い引きに精を出す。

洪水は終わった。アウシュヴィッツの暗い空に、ノアは虹が輝くのを見ている。世界は彼のもので、子孫を増やすべきだった。(Opere, I: 323)

ここで、多くの人が命を落としたアウシュヴィッツにおける災禍は、『創世記』における大洪水と結び付けられる。さらに、やっと立ち上げられるまでに回復したレーヴィが収容所の外で見た世界の描写においても、再び『創世記』への言及が見られる。

あの日々にそれらの場所で、戦線が過ぎ去った直後、地の表面に強風が吹いた。私たちを取り巻く世界は、原初の混沌へと戻ったように見え、左右が非対称だったり何か欠けていたりする異常な人間の見本で溢れかえった。一人一人が、訳もわからずそうしているのか、あるいは確固たる意志をもってやっているのか、自分の居場所、自分の領域を懸命に探して活発に動き回っていた。その動きは、古代人の天地創造論において詩的に語られる、四元素の粒子のようだった。(Opere, I: 327)

「強風 *vento alto*」の“alto”は、一般的には「高い」という意味の形容詞だが、ここでは「風力が強い」という意味と「天の」という意味を含むだろう。新共同訳『聖書』の『創世記』に「神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め、地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた」(『創世記』8.1)とあるが、引用が、この叙述を念頭においたものであることは明らかだ。しかし、ここで引用が完全に旧約聖書に合致しているわけではないことには注意が必要である。人々が右往左往するさまは、「原初の混沌に戻った」、あるいは、「古代人の天地創造論において詩的に語られる、四元素の粒子のようだった」と形容される。

一方で、短編小説「ケンタウルス論」においても、ケンタウルス族に伝承される「創世伝説」は、聖書の『創世記』を下敷きとしている。

興味深いことには、彼らの伝説においても、すべての始まりは、大いなる知性の人間、発明者かつ救世主であるノアのような人間だ。この人物は、彼らの間では「クトゥノフェセト」と呼ばれていた。(Opere, I: 595)

だが、大洪水が起きたとき、ケンタウルス族がクトゥノフェセトの箱舟に乗っていたわけではない。ではどうやってこれらの種族が生まれたのか。

水が引いたとき、地上は熱を持った泥の厚い層で覆われた。さて、この泥だが、その腐敗物の中には洪水で死滅したすべてのものが発酵した状態で含まれ、並外れて肥沃だった。太陽の光が届いたとたん、泥は新芽で覆われ、あらゆる種類の草木が育った。さらに、柔らかく湿ったその懐においては、箱舟で救われたすべての種の婚姻が行われた。それは、二度と繰り返されることのない、狂おしい激しい豊穡の時であり、宇宙全体が愛に感応し、すんでの

とこゝろで混沌へと逆戻りしてしまうところだったのだ。(Opere, I: 596. 傍点は引用者)

大洪水の後に新しい生命体が再生する様子は、先に引用した『休戦』における、戦線が遠のいた後に、「世界が原初の混沌に戻ったように見え(た)」と同様の表現が使われている。さらに、「宇宙全体が愛に感応し、すんでのところで混沌へと逆戻りしてしまうところだった l'universo intero sentì amore, tanto che per poco non ritornò in caos」という表現は、もうひとつの重要なテキストを呼び出す。それは、「ケンタウルス論」の背後に控えたダンテの『神曲 *Commedia*』地獄篇第十二歌である<sup>7</sup>。

第十二歌において、地獄を旅するダンテと案内人ウェルギリウスは、激しい山崩れの後にできた急峻な谷を降りてゆく。この山崩れは、キリストが受難の後に地獄へと下ったときに起きた大規模な地震<sup>8</sup>によるものとウェルギリウスは説明する。しかしこの時、キリスト教の信仰を持たないウェルギリウスはその地震を、「(地面は)とても激しく揺れたので、私は、全宇宙が愛に感応していると思った。その愛ゆえに、世界は幾度も混沌へと戻るとする者もいる<sup>9</sup>」(*Inferno*, XII, vv. 41-43)と説明する。Chiavacci Leonardiの注釈によれば、ここではギリシアの哲学者エンペドクレスの教義が参照されている。それによれば、四元素の調和は、それらの元素を混合することにより、混沌(カオス)を引き起こす。逆に、四元素の不調和は、元素を分け、宇宙の秩序を作る。混沌と秩序は互いに争い、宇宙ではこのふたつの状況が交互に起きる(Alighieri: 212)。つまり、レーヴィは、『休戦』と「ケンタウルス論」において、同じ「災禍の後の再生」というモチーフを組み込んだが、そこにおいては、『創世記』とエンペドクレスの四元説という、相容れない言説を混成させて再生のイメージを描いた。のみならず、『神曲』に現れる「愛=混沌」の図式を「再生」に結び付けて、まず愛があり、混沌があり、その後再生するというイメージを作り上げた。

さらに、『神曲』地獄篇の第十二歌において唐突にエンペドクレスの宇宙観への言及が現れるのは、注釈者によれば、「神」の存在をぬきには説明できない神秘的な出来事(時間が存在しない地獄で、地震が起きる)を、「現世的な理性 *ragione umana*」によって解釈した結果である(Alighieri: 213)。「ケンタウルス論」の語り手は、「ケンタウルスの伝説は、聖書のそれよりも、もっと理性的 *razionale* である」(*Opere*, I: 595)とも述べている。すなわちここでは、エンペドクレスの引用によって、ケンタウルス族の創造伝説に——ひいてはケンタウルス族の世界観に——神が存在しないことが示唆される<sup>10</sup>。

「ケンタウルス論」においては、大洪水の後、泥の中で「箱舟で救われたすべての種の婚姻」ばかりではなく、ありとあらゆる異種混交がおこなわれる。

<sup>7</sup>『神曲』地獄篇第十二歌にはケンタウルスが登場する。さらに、レーヴィの「ケンタウルス論」においては第十二歌からの直接的な引用が三箇所確認されており(Cfr. Pianzola, 2017: 325)、第十二歌が「ケンタウルス論」の材源のひとつであることはほぼ間違いない。

<sup>8</sup>「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについてた多くの聖なるものたちの体が生き返った。」(『マタイによる福音書』27章51節)

<sup>9</sup>“[...] tremò sì ch' i pensai che l'universo / sentisse amor, per lo qual è chi creda / più volte il mondo in caosso converso [...]”.

それは他ならぬ地が天と姦淫していた日々である。ありとあらゆるものが芽生え、なにもかもが実を結んだ。すべての婚姻から子どもができたが、生まれるのは数ヶ月後ではなく、数日後だった。婚姻だけではなかった。どのような接触も、結びつきも、それが、たとえつかの間のものであっても、たとえ異なる種のあいだであっても、獣と石も、木と石も、子を成したのだ。生ぬるい泥の海は、冷たく内気な大地の表面を覆い隠し、ひとつの広大な婚礼の床となった。そこはすみずみまで情欲に沸き立っており、歓喜する芽に溢れかえっていた。  
(*Opere*, I: 596)

大洪水という災禍が去った後、「調和」の時期に、生ぬるい泥の中に「歓喜する胚芽 *germi giubilanti*」が溢れる——そして、この「第二の創世 *seconda creazione*」が「真の創世 *vera creazione*」であり、ケンタウルス族の起源である。

この第二の創世こそは真の創世であった。というのも、ケンタウロス族に言い伝えられているところによれば、誰もが気づいたある種の類似性、ある種の集合性は、それ以外の方法では説明できないだろうから。イルカは魚に似ているのに、なぜ子どもを産み、乳を飲ませるのか？それは、マグロと牛の息子だから。蝶の優美な色や空を飛ぶ能力は何に由来するのか？彼らはハエと花の娘だから。また、亀はヒキガエルと岩の子どもなのだ。[...]  
[...] このようにして、彼ら自身、すなわちケンタウルスも生まれた。というのも、この起源の祝宴、パンスペルミアには、わずかに生き残った人類も参加していたのだ。特に、手に負えない息子の黒いハムがそこにいた。彼とテッサリアの雌馬との荒々しい情交から、ケンタウロスの第一世代が生まれたのである。( *Opere*, I: 596-7)

『休戦』においては、「災禍」が過ぎ去った後の「混沌」の状態までしか描かれていないが、「ケンタウルス論」においては、「混沌」の次に、「異種混交」が起きたことが記され、これこそが、「真の創世」なのであると明言されている。

『創世記』とエンペドクレスの四元説が混合された再生のイメージ、これが、『休戦』と「ケンタウルス論」が共有する地点である。しかし、ふたつのテキストはこの一点で交わるものの、この箇所とテキスト全体との関係はまったく異なる。

<sup>10</sup> レーヴィは無神論者だった。彼はさまざまなインタビューで神の不在に言及しているが、晩年のインタビューでは以下のように語っている。「収容所生活を、(神への)無関心を証明するための厳しい試練のようなものとして過ごしたと思います——とプリーモ・レーヴィは答える——。ある意味では、私の収容所仲間で信仰を持っているエリー・ヴィーゼルよりも、私にとって、すべてのことがよりシンプルでした。彼は、悪の勝利という巨大なトラウマを被るという酷い目にあって、その後、こんなことを許し、殺戮者たちを止めるために介入しないことに対して、神を非難するようになりました。私は以下のように結論するだけでした。『そうか、やっぱり本当だった。神はいない』」(*Non l'ho mai incontrato, neppure nel «Lager»*, in «Gente», XXVII, 9 dicembre 1983, n. 48, ora in *Opere*, III: 387)。

## 5. 『休戦』と「ケンタウルス論」の分岐点

『休戦』において、先ほどの引用はすべて冒頭部分からのものである。そこで描かれる戦火が消えた後の「再生 *rinascita*」というテーマは、ある種の通奏低音となって、『休戦』という作品の全編を通じて繰り返される「グロテスクな怪物とも言えそうな」（竹山, 2011: 133）人物たちとの時にユーモラスな邂逅のエピソードにおいて響き続ける。しかし、そのような復活への期待の一方で、『休戦』という作品は絶望に縁取られている。無事にトリノーノに帰還した「私」は、夜になると悪夢に襲われる。その夢の中で、私は「混沌 *caos*」の中に取り残される。そして、「ラーゲル以外は何も真実ではない」、それ以外は「短い休暇」、すなわち「休戦」でしかないこと結ばれる。

今となってはすべてが混沌へと変わってしまった。私はただひとり、灰色で濁った虚無の中心にいる。私はこれが何を意味するのか理解している。私はそれを常に知っていたことをわかっている。私は再びラーゲルにいるのだ。そして、ラーゲル以外には何も真実ではない。それ以外のものは、短い休暇、感覚の錯覚、夢にすぎない。家族も、花咲く自然も、家も。今、この夢全体、平和の夢は終わった。そして、その夢の外側にある、それに続く冷酷な夢の中で、よく知っている声が響くのが聞こえる。たった一言、尊大さはなく、むしろ短く静かな声だ。アウシュヴィッツの朝の命令、恐れながらも予期されていた外国語の言葉だ。起床せよ。「フスターヴァチ」。(Opere, I: 470)

レーヴィは『休戦』の学校版に付した注の中で、結末の言葉が、小説の巻頭にエピグラフとして掲げられた詩（レーヴィが1946年に書いた詩）と小説のタイトル「休戦」の意味を明らかにするとし、「夢の中でラーゲルは普遍的な意味へと拡大し、人間生存状況の象徴となっている」（Opere, I: 1406）と述べている。すなわち、「強風」によって引き起こされる復活と新しい生への希望は、アウシュヴィッツの遺した深い傷によって再び閉ざされることになる。『休戦』においては、戦火が消えた後の混沌の中から何か新しいものが生まれる可能性を示唆しつつも、その希望は「ラーゲル」という悪夢の再来によってかき消されている。

一方、「ケンタウルス論」においては、混沌の後の世界が語られる。物語の中心にあるのは、災禍が過ぎ去った後の「調和」した世界における愛と混沌の中から、異種混交が起き、その結果、新奇な生き物「ケンタウルス」が生まれたということ、そして、この生き物の生き方、在り方だ。「証言」としての『休戦』においては実現されなかった「再生」の夢は、「ファンタジー」である短篇小説「ケンタウルス論」の中で、より詳細に語られることになる。(つづく)

## 参考文献

### テキスト

Opere, I = Levi, Primo, *Opere complete I*, a c. di Marco Belpoliti, Einaudi, Torino, 2016.

Opere, III = Levi, Primo, *Opere complete III*, a c. di Marco Belpoliti, Einaudi, Torino, 2016.

### 引用文献

Alighieri, Dante (2001), *Commedia*, con il commento di Anna Maria Chiavacci Leonardi, Zanichelli, Bologna.

Belpoliti, Marco (1997), “Io sono un centauro”, Introduzione a Primo Levi, *Conversazioni e interviste 1963-1987*,

- a c. di Marco Belpoliti, Einaudi, Torino, VII-XIX.
- Bidussa, David (2017), “Verbi”, in *Riga 38: Primo Levi*, a c. di Mario Barenghi, Marco Belpoliti e Anna Stefi, Marcos y Marcos, Milano, 384-393.
- Cassata, Francesco (2019), “Fantascienza?”, in Aa.Vv., *Lezioni Primo Levi*, a c. di Fabio Levi e Domenico Scarpa, Mondadori, Milano, 313-413.
- Gordon, Robert S. C. (2003), *Primo Levi: Le virtù dell'uomo normale*, tr. it. di Dora Berucci e Bruna Sravia, Carocci, Roma.
- Levi, Primo (1958), *Se questo è un uomo*, Einaudi, Torino. 竹山博英訳『【改訂完全版】アウシュヴィッツは終わらない これが人間か』朝日新聞出版, 2017年.
- Levi, Primo (1963), *La tregua*, Einaudi, Torino. 竹山博英訳『休戦』岩波文庫, 2010年.
- Levi, Primo (1966), *Storie naturali*, Einaudi, Torino. 関口英子訳『天使の蝶』光文社古典新訳文庫, 2008年.
- Levi, Primo (1987), *I sommersi e i salvati*, Einaudi, Torino. 竹山博英訳『溺れるものと救われるもの』朝日新聞出版, 2014年.
- Mattioda, Enrico (2011), *Levi*, Salerno, Roma.
- Pianzola, Federico (2017), *«Le trappole morali» di Primo Levi: Miti e fiction*, Ledizioni, Milano.
- 竹山博英 (2011), 『プリーモ・レーヴィ：アウシュヴィッツを考え抜いた作家』言叢社.